

## 続・南極に関するイベントの実施報告

宮崎科学技術館  
学芸課 主事 末廣 信太郎

研究成果の概要：

- (1) 平成26年7月9日～26日に企画展「夏の特別企画 南極展」を開催し、総計2,591名（関連イベントも含む）が来場した。
- (2) 昨年度開催した際には、南極観測隊の装備の有効活用、映像展示物の設置、展示内容の精査、会期が短いといった点が課題として残った。
- (3) 本年度の企画展においてはDVD上映コーナーを設置し、それにより環境問題についても分かりやすく解説できるようにも対応した。会期も延長させることができ、新たな展示物や週末特別イベントも企画したので、バラエティーに富む発展的な企画展とすることができた。
- (4) 観測隊装備の有効活用については引き続き検討が必要であり、ほかにも館内の他のイベントとの調整や人員配置、サイエンスカフェの話題提供者と適切な場所の選定という点は今後対応していくかなければならない課題である。

### 1. 研究の背景

昨年度、宮崎科学技術館（以下、当館）では自衛隊からの南極の氷の贈呈に合わせて、南極に関するイベントを企画し、実施した。そのイベントの実施報告として、昨年度の研究事業において企画から実施までを記録し、今後の開催の参考になるようイベントを評価し、課題を分析していた。

本年度も同様のイベントの企画を担当することになったため、昨年の反省がどのように生かされているか、事業としてどのように発展し、どのような課題が残されているかなどを考慮し、記録として残していくことが必要であると考えた。

### 2. 研究目的

昨年度の南極に関するイベントを振り返り、

本年度の企画及び実施に生かされているかを評価・分析し、さらなる課題に解決策を提案することを目的とする。そこで、本研究では昨年度のイベントの反省をし、それが具体的にどのように生かされているか、また新たな視点や企画が盛り込まれているかを考慮する。そして、イベント実施時に来館者にとったアンケートなどを分析することにより、さらなる課題を発見し解決策を提案する。

### 3. 研究の方法

- (1) 昨年度のイベントを振り返る
- (2) 本年度のイベントを企画する
- (3) イベントの実施する（7月9日～26日）
- (4) 本年度のイベントを振り返り、アンケート結果などを集計・分析する
- (5) 今後の課題を見出し、解決策を提案する

## 4. 研究成果

### (1) 昨年度の課題

企画展においては、国立極地研究所より借用した南極観測隊の装備の有効活用、ビデオ映像など視聴覚に訴える映像展示物の設置、展示内容の精査といった点が課題として残った。また、展示期間が短く、週末が1回しか含まれていなかった。

### (2) 課題の解決

映像展示物については、DVD上映を展示の一部として取り入れることにより、より分かりやすく訴求力のある展示とすることができた（写真1）。DVDは、「南極観測の新たな幕開け」（23分／国立極地研究所より借用）と、「サイエンスチャンネルスペシャル 驚異の科学映像 地球温暖化と戦う」（44分／科学技術振興機構より提供）の2本を週替わりで上映した。南極観測に使う設備や観測船について、また南極観測と地球の気候変動の調査研究について説明したものであり、ほかの展示物を補強するものとして役立った。

また、昨年度の企画展において、特に環境問題に関する展示が分かりにくかったというアンケート結果となっていたため、展示の仕方や内容の精査が必要であった。「地球温暖化と戦う」のDVDはこの環境問題を扱っており、課題解決のひとつとすることことができた。

昨年度の企画展は休館日を含め10日間しかなく、そのうち週末は1回のみであった。夏休

み期間中でもなかつたため、来場者も伸び悩んだ。また、南極の氷の贈呈式の日に展示終了となつたため、贈呈された南極の氷と展示とを直接関連付けることはできなかつた。そこで、本年度は会期を大幅に延長した結果、来場者も倍増しただけでなく（表1）、夏休み期間中に常設展示室内で行われる南極の氷体験とも直結させることができた。

展示パネルの中で等身大のコウテイペンギンと背比べをするコーナーが昨年もあったが、この等身大パネルの大きさに誤りがあったことが判明した。ペンギンの体の大きさは、図鑑等では「体長」と記されており、ペンギン

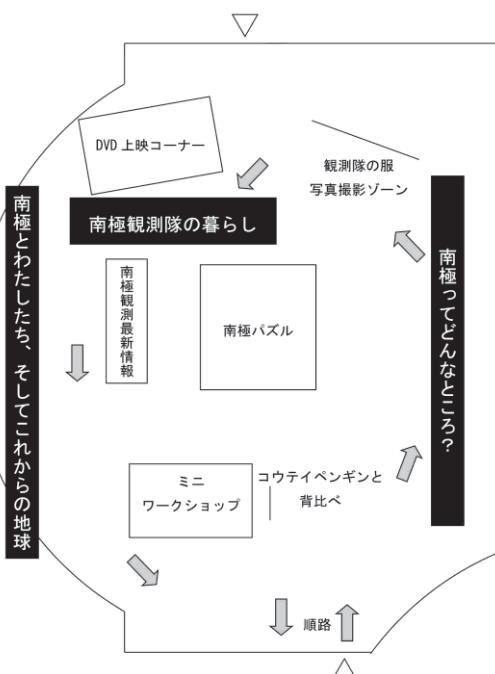


図1 展示配置図

	小人	大人	合計
企画展(7/9~26)	1002	1076	2078
週末特別イベント			
星空体験(7/12~13)	83	85	168
クイズラリー(7/19~21)	87	16	103
氷贈呈式(7/20)	43	44	87
サイエンスカフェ(7/26)	42	113	155
総計	1257	1334	2591
※平成26年度総計	512	580	1092

表1 南極関連イベントの入場者・参加者数

は鳥類であるため、くちばしから尾の先までを計測する。そのためペンギンが直立した状態では、体長＝身長とはならず、昨年作製した身長130cmの等身大パネルは大きすぎであった。企画展前の調査として、国内でコウテイペンギンの飼育をしている名古屋水族館に問い合わせ、80～90cm程度という正しい身長になるようパネルを作製しなおした（写真2）。

### （3）新たな取り組み

展示パネルについては、昨年度使用したものを再利用し、レイアウトもほぼ同様にしたため（図1）、時間やコストを大幅に節約することができた。その分、他のイベントなどの準備に時間や労力を割くことができ、展示を工夫したり付け加えたりし、バラエティーに富む展示内容にすることができた。全体としては昨年よりも発展的な企画展とすることができたと考える。

今回付け加えた新たな展示物は、DVD上映コ



写真1 DVD上映コーナー

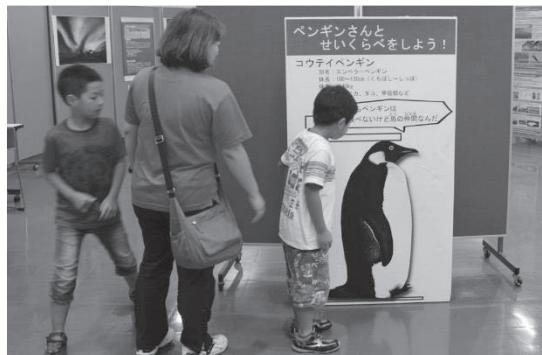


写真2 コウテイペンギン等身大パネル

ーナーだけでなく、南極パズル（写真3、写真4）やミニワークショップコーナー（写真5）も追加した。南極パズルは、完成させると南極大陸にどんな生物が生息しているかをイラストで理解することができるようになっている。このコーナーでは主に未就学児とその保護者が遊んでいる姿が見られた。ミニワークショップコーナーでは南極に行ったらしてみたいことを、雪片を模した紙に書いて貼り付けていく。小さな子どもから大人まで、来場者による豊かな想像力でコーナーはいっぱいになった。これらの展示物により昨年よりも幅広い年齢層に対応できる展示となった。

会期の延長に伴って週末が3回含まれるようになり、それぞれ異なった週末特別イベントを実施した。「南極の星空体験」は南極と日本での星座の見え方や日周運動による星の動きの違いについて星を投映しながら職員が解説するイベントである（写真6、写真7）。



写真3 南極パズル



写真4 南極パズルで遊ぶ子どもたち

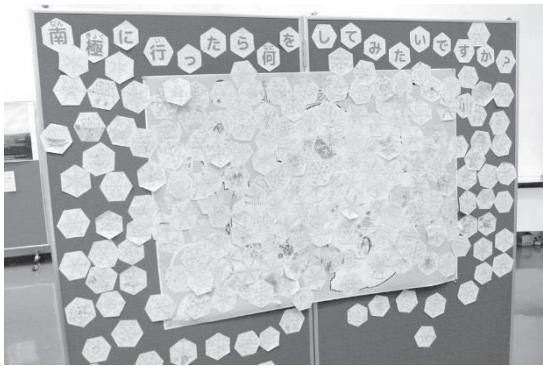


写真5 ミニワークショップコーナー

ほかにも日本では見られない星や星座の紹介、極夜、オーロラ映像の投映など、南極の夜を疑似体験することができる。国立極地研究所よりドームふじ基地の360°パノラマ写真を提供していただき、星の投映の際にスカイラインとして使用した。星好きな大人を主なターゲットとしていたが、親子連れの参加者が多かった。プラネタリウムの職員に協力をお願いし、星空のライブ解説を行ってもらったが、言葉遣いなども子どもでも分かりやすいように調整してくれた。また、解説の中でも、解説者自身の体験や感動、地球を大切にしたいという想いも含まれていたことが、話を生きたものにしていた。このイベントにより、星空という切り口から南極についての関心を高めることができただけでなく、セクション同士が相互に連携し合い、費用をかけずに館の機材・人材を有効活用することもできた。参加者に1~4点の投票形式で評価を行ってもらった結果、90%以上の参加者が3点以上と回答しているので、満足度も非常に高かつたと言える（写真8、グラフ1）。今後も続けていきたい企画である。

2回目の週末には「南極大陸横断ウルトラクライズラリー」を開催した。館内を南極大陸に見立てて、観測基地など大陸内の各ポイントでクイズを解きながらゴールを目指す（写真

9）。ゴールではクイズの答え合わせを行い、南極横断証明書（写真10）と景品を参加者に渡した。横断証明書にはクイズの答えと簡単な解説も付記しており、イベント後でもそれをきっかけに南極について興味を喚起し、会話することができるようになっている。当初は子どものみの参加を想定していたが、大人の参加者もあり、親子でクイズラリーを楽しむ姿が見られた。また、クイズの内容は企画展などとも関連性が高く、常設展示である南極の石にもポイントを設けていたので、各イベントや展示物が独立することなく相乗効果を発揮していた。

サイエンスカフェは昨年度も行ったが、今回は市内中心部のオープンスペースで開催したという点が新たな取り組みである。話題提供は第54次南極観測隊に同行した、共同通信社社会部の興梠敬介氏に依頼した。科学館に来ることの少ない年齢層の参加者があり、普段から人通りもある場所である上に、付近で開催される祭りの直前の時間帯ということで、多くの人が通りがかりに足を止めていた。このことは科学館のアピールにつながった。会場内に国立極地研究所から提供された南極の氷を置き、自由に触れられるようにしておいたところ、多くの人の興味を引いていた。参加者のアンケートによると市の公共掲示板のポスターを見て参加した人もおり、広報の効果も十分あったと考えられる。

なお、南極の氷贈呈式及び南極の氷体験について他セクションに企画・実施を依頼したため、本研究では割愛する。

#### (4) 今後の課題

企画展においては、週末特別イベントなどにより館全体で南極を表現できた一方で、期間が長くイベントも多かったため、会期中の

会場内の巡回が行えず、観測隊の装備試着の声掛けなど来館者への応対ができなかった。この点に関しては、対応できる職員を配置できるよう調整を図ると同時に、運営ボランティアに協力していただくこともできると考える。

また、週末特別イベントについては特に、館内の他のイベントと同時開催となる日もあり、人員配置など困難な点があった。よく計画・調整した上で開催する必要がある。

さらに、サイエンスカフェは半屋外の会場



写真6 南極の星空体験

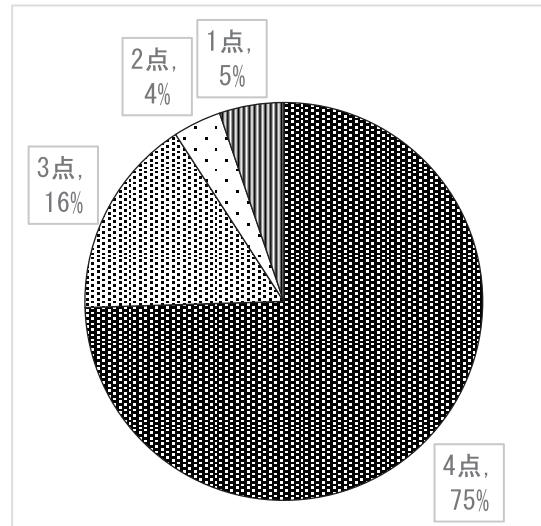


写真7 南極の星空体験



写真8 星空体験評価アンケート

を使用したが、夏季であり非常に暑かったため、時間を短くするか暑くない適切な会場を選定するなどの対応が必要である。アンケートの中にも、「暑さや周りの雑音で集中できなかった」、「声が聞こえにくかった（雑音、音響装置の問題）」、「スライドが小さくて見えにくかった」といった回答があった。今



グラフ1 南極の星空体験参加者の評価



写真9 南極大陸横断クイズラリー



写真10 南極横断証明書



写真 11 サイエンスカフェ



写真 13 カフェ会場での南極の氷展示



写真 12 サイエンスカフェ

回のカフェのことを知らず、偶然通りがかつた人の興味を引くことを考えて、敢えて人通りのある会場を選定したが、話を聞きに来た参加者にとっては集中力をそぐ雑音の多い環境ともなってしまった。今後は両者のバランスに配慮し、開催時期が夏季であることを考えると、屋内で開催することが望ましい。

また、話題提供者については宮崎に縁のある人にこだわっていたため、研究者は見つからず、研究者と市民をつなぐサイエンスコミュニケーションという意味では不十分であった。宮崎出身という枠を外したうえで、地元の人の興味を引きそうな人材・題材を探していく必要があるのかもしれない。

最後に、南極に関するイベント及び本研究を行うにあたり、資料の提供や協力いただいた国立極地研究所、宮崎山形屋、科学技術振興機構そして共同通信社興梠敬介氏に感謝を

表す。また、イベントのために企画課をはじめ他セクション職員にも感謝したい。

## 5. 参考図書、論文等

### 〔図書〕（計1件）

- ①トニーDウィリアムズ, 他、ペンギン会議訳、平凡社、ペンギン大百科、1990